



シノドス実施への道

地方教会ステージ

(教区／エパルキア)

－2027 年上半期－

[原文：イタリア語]

振り返り

各地方教会の
評価アセンブリー準備に
同伴する

司教とシノドス・チームのための解説集

－2026 年 7 月 27 日－

目次

はじめに

1. 物語形式の報告書を準備する

- a) 旅の記憶を集める
- b) 変革のしるしとダイナミズムを認める
- c) 物語形式の報告書の構成をまとめる

2. 評価アセンブリーを準備し、それを生きる

- a) アセンブリーを準備する
- b) アセンブリーを進行する
- c) アセンブリーの成果

3. 参考資料

- A. 実施スケジュール
- B. 「振り返り」ステージ
- C. 教区／エパルキア シノドス・チーム
- D. 物語形式の報告書のために
- E. 評価アセンブリー
- F. 各国／各地域シノドス・チームの役割
- G. シノドス事務局のサポート

「使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことを
みなイエスに告げた」(ルカ 9・10)

本「解説集」は、2027 年上半期に開催される評価アセンブリーの準備および開催にあたり、各地方教会を支援することを目的としており、このアセンブリーをもって、「振り返り」と題されたシノドス実施プロセスの各地方教会（教区／エパルキア）のステージが完了することになります。

聖書において、「思い起こす」とは、歴史を通じての神が真実の方であることを認識し、それによって現在を識別することを学び、神が準備する未来へと心を開くことを意味します。その意味で、それは単に過去を振り返るだけにとどまらない、はるかに深い意味をもっています。イスラエルは、主の偉大なわざを思い起こすことによって、自らの歩みを再解釈することを学びます。弟子たちの宣教を通して、神が成し遂げたことを認識するよう、イエスは彼らを招きます。初代教会の共同体もまた、聖霊の働きとともに識別するために、自分たちが体験した出来事を語り合いました。評価アセンブリーも、この同じ霊の動きに導かれるものです。それは、その地方教会が集い、歩みの過程で主が成熟へと導いてくれたことを語り合い、それに感謝をささげ、信頼感を新たにし、主が招いている次の歩みを受け入れるための機会なのです。

シノドスの実施プロセスの基本的な参照点は変わらず、『最終文書』全体です。2025 年 6 月 29 日に公表された『シノドス実施ステージの旅路』は、シノドス実施プロセスの教会にとっての枠組み、意義、および方法を示しています。また、2026 年 5 月 20 日に公表された文書「2027-2028 年 各アセンブリーへ向けて：準備のためのステージ、基準、ツール」は、これまでの歩みを把握し、評価するプロセスに伴うための、より具体的な指針を示しています。本「解説集」は、これらの文書と同じ路線のものであり、それらの内容を前提としています。

シノドスの実施プロセスに関連するすべての文書は、ウェブサイト www.synod.va でご覧いただけます。ただし、参照しやすくするため、本「解説集」の第 3 部では、参考資料の中から、とくに実践的な内容に焦点を当てた抜粋をまとめています。本文中の適切な箇所には、第 3 部にまとめられた資料への参照箇所が記されています。

アセンブリーの準備には、確固たる専心が必要となります。その成果が実りあるものになるのは、何よりもまず、各共同体が聖霊の導きに進んで従うかどうかにかかっており、その次として、入念な組織運営と、用いられるツールの質にも左右されます。これらもまた重要な要素です。この取り組みの核心にあるのは、シノドスの実施プロセスにおいて、各共同体が体験してきたことを集約し、理解を深め、その多様な体験を対話の中にもち込むことであり、それによって、主が何を成熟させ、主の教会に次にどのような歩みを求めているのかを、ともに理解していくことです。

この観点から、本「解説集」は、このプロセスを導き、活気づけるよう招かれた人びとの活動を支援することを目的としています。したがって、本「解説集」は、まず第一に、その責任を担う各司教と、シノドス・チームを対象としています。そのようなチームがまだ設置されていない場合、アセンブリーに向けた十分な準備を確保するためには、チームの設置を最優先の課題として取り組む必要があります¹。本「解説集」は、適用すべき一つの型を提示するものではなく、各地方教会が旅路のこのステージに備え、それを体験する上で役立つ問い、基準、実践的指針を提供することで、一つの進め方の可能性を示唆するものです。

シノドス事務局が提供するすべての指針と同様に、本「解説集」もまた、識別のプロセスを通じて現地の状況に合わせて適用されるべきです。この識別は、各地方教会が、自らの歴史、特性、社会文化的背景、規模、組織体制、可能性、そしてリズムに照らして行うものです²。

このアセンブリーは、各地方教会において、真に教会的で、シノドス的な方法で歩んできた道のりを評価する能力を強化する貴重な機会となります（『最終文書』95-102 項参照）。**評価（アセスメント）*とは、何よりもまず感謝と真理の体験です。**つまりそれは、歩んできた道のりを振り返り、実を結んだ成果や直面した課題を認識し、**聖霊の働きに心を開きながら、主がその共同体に求めている、次に進むべき歩みを明らかにすることを意味します。**このようにして、このアセスメントは、より一層回心できる教会を形づくことに貢献します。もしこのアプローチが、次第にわたしたち各教会の日常生活の一部となれば、アセンブリーは、すでにそのもっとも貴重な実りの一つを結んでいることになるでしょう³。

各地方教会には、それぞれ異なる物語があることでしょう。関係性、意思決定プロセス、共同責任、あるいは宣教において、すでに重大な変化を経験している教会もあるでしょう。また、まだ不安定ながらも希望に満ちた新たな方向性を垣間見た教会もあるでしょう。さらに、この旅の最初の成果として、これまでとは異なる方法で互いに耳を傾け、「霊における会話」を実践することを学んだと気づいていく教会もあるでしょう。いくつかの教会にとっては、このアセンブリーがシノドス流の刷新に向けた長い旅路における最初の歩みの一つとなっているかもしれません。**各地方教会は、変革をもたらす霊のわざをいかに受け入れたかを率直に認め、自らの選択がもたらした成果を評価し、新たな自覚をもって歩み始めた道を歩み続けるよう招かれています。**

¹ 本文書の第3部、「C. 教区／エパルキア シノドス・チーム」参照。

² 各国、または地域のシノドス・チームはまた、こうしたインカルチュレーションの働きに同伴し、支援しうるものである。「F. 各国／各地域シノドス・チームの役割」参照。

* こうした観点から、アセンブリーの準備と開催によって、各地方教会は、これまで歩んできた道のりを「共同体としての回心」の体験としてあらためて振り返るよう招かれ、耳を傾け、識別し、共同責任をとり、宣教することで、どのようにその共同体の生き方が次第に形づくられているかが問われる。

³ 「E.1 各アセンブリーの意味と、用語『評価』の意義」参照。

教皇レオ十四世が想起したように、「シノダリティとは、一連の会議でもなければ、作業手法でもありません。それは霊的な在り方です。それは出会いから生まれ、耳を傾けることを通じて成長し、識別するうちに成熟するのです。真の問いは、わたしたちがどれだけの会話を組み立てられるかではなく、わたしたちの出会いがどのような福音的質を備えているかです。謙遜さと自由をもって互いに耳を傾け、霊が働く場を確保するとき、わたしたちの会話は単なる意見交換にとどまらず、回心場となり、そこで主への真実さのうちにともに成長するのです」（臨時枢機卿会議閉会時のあいさつ、2026年6月27日、非公式英訳から）。こうした観点から、アセンブリーの準備と開催によって、各地方教会は、これまで歩んできた道のりを「共同体としての回心」の体験としてあらためて振り返るよう招かれ、耳を傾け、識別し、共同責任をとり、宣教することで、どのようにその共同体の生き方が次第に形づくられているかが問われるのです。

アセンブリーの準備と運営が、各地方教会によるシノドスの実施のすべてなわけではありません。つまり、アセンブリーの準備と運営とは単純に、シノドス流の選択、ダイナミズム、実践、組織を通して各地方教会のアイデンティティ、関係性、生き方が徐々に形づくられていくプロセスの中、振り返りをするする時なのです⁴。

本「解説集」は、密接に関連し合う二つの部分に分かれています。第1部は、物語形式の報告書の起草におけるシノドス・チームの取り組みに付随するものです。第2部は、評価アセンブリーの準備と運営に関する指針を示していて、そのアセンブリーの間、その地方教会は物語形式の報告書を受けとり、さらに検討を深め、さらに「諸教会への手紙」の草案を作成するよう求められます。最後に、すでに述べたように、第3部では、すぐに参照できるような、抜粋された参考資料をまとめています。

1. 物語形式の報告書を準備する

「2021_2024年シノドス総会後に歩んできた道のりを踏まえ、その成果を他の諸教会と教皇へのたまものとして提供することを見据えて、皆さんの共同体の中で、宣教するシノドス流の教会の、こういった具体的形、そして、こういったシノダリティの新たな道が現れていますか」

この問いは、その地方教会が歩んできた道のりを振り返り、その成果を自覚する上で支えとなるものです。この問いによって、共同体は、感謝と誠実さをもって最近の体験を振り返り、主がどのような新たな一歩を踏み出すよう招いているかを見直すよう促されます。

このステージの対象は、地方教会が示すあらゆる姿です。神の民全体は、多様なカリスマ、召命、奉仕職に応じて、貢献するよう招かれています。この物語形式の報告書は、神の民の声に耳を傾け、共同で実施した識別から生まれました。したがって、互いに耳を傾け合い、参加し、共同識別を行う

⁴ 「A. 実施スケジュール」「B. 『振り返り』ステージ」参照。

よう促す場と機会を設けることが重要です。この旅路において、司教、参与機関とシノドス・チームはそれぞれ、異なるが互いに補完し合う責任を担っています。

- **司教は**、自らの地方教会の中の一一致の源として、神の民を招集し、この旅路のステージを歩むよう導くとともに、その教會的意義を保証するものです。司教は、参与機関、とりわけ教区／エパルキア「司祭評議会」と「司牧評議会」を招集します。**司教は、シノドス・チームを任命し、一貫してその活動に同伴し、準備の各ステージを通じて進捗を注視し、チームと対話を重ねます。**司教独自の奉仕職を全うすることで、司教は、このプロセスの教會的な性格を保証し、福音に叶う識別の基準を想起させ、また物語形式の報告書と書簡を、その地方教会が歩んできた道のりの真の表現として認証します。このようにして、このプロセスの成果は共有財産となり、旅路を継続するための方向性が提供されるのです。
- **参与機関**、とりわけ教区／エパルキア「司祭評議会」と「司牧評議会」は、共同責任と教會的識別が行われる通常の場合です。司教がプロセスを形づくり、歩んできた旅路を評価し、実を結んだ成果を認証する上で、これらの機関が補佐します。可能であれば、これらの機関はまた、各「小教区司牧評議会」の代表者を巻き込むべきです。
- **シノドス・チームは、そのプロセスを活性化し、円滑に進めることで、地方教会に奉仕します。**このチームは、個人、小教区、男女奉獻生活者の共同体、グループ、諸団体、機関と連携し、資料を収集し、対話を促進し、アセンブリーが建設的な形で開催されるための条件を整えます。司教同伴のもと、その役割は、聖霊がその生活の中で成熟させようとしているものを、地方教会が認識できるよう支援することです。したがって、シノドス・チームは、共同の祈りを深め、神のことばと霊における会話に耳を傾けることで、その奉仕を教會的識別の体験として実践することが求められています⁵。

シノドス・チームの支援を受け、地方教会は、三つの活動を軸とした旅路を歩むよう求められています⁶。これら三つの動きは互いに絶えず関連し合い、段階的に物語形式の報告書の作成へとつながっていきます。

a) 旅路の記憶を集める

物語形式の報告書の作成は、個人や共同体の証言、さらにその記憶を留める資料を通じて、共同体生活に耳を傾けることから始まります。これらを丁寧に集めることは、地方教会がこれまで歩んできた旅路を振り返る助けとなり、聖霊に耳を傾けることから生まれた洞察の一部が失われるのを防ぎます。したがって、シノドス・チームの最初の役割は、ここ数年にわたって共同体が歩んできた道のりをあかしできるもの、すべてを集めることです。これらの資料の中には、このプロセスの中で作成された**書類、報告書、寄稿文、その他の文書**など、すでに利用可能なものもあれば、また、**個人や共同**

⁵ 「C.3 シノドス・チームと参与機関」参照。

⁶ 可能な限り、シノドス事務局は各地方教会に同伴するよう努める。「G. シノドス事務局のサポート」参照。

体の記憶を利用し、小教区の司祭を巻き込むよう配慮し、またその地方教会のさまざまな構成員の貢献を奨励し評価することが必要な場合もあります。

これは、2021年に実施された意見聴取を繰り返すということではなく、それ以来歩んできた旅路の記憶をたどり、教会生活においていのちの源泉であり続けているものを認識し、主のみ前に、わたしたち自身がともに身を置くことなのです。

共同体が、いかにして、かつてないほどシノドス流の姿へと成長しているかを認識するためには、**教会生活のさまざまな領域における体験**を集めることが重要となるでしょう。具体的には、日常的な司牧奉仕職、小教区の生活、男女奉獻生活者や各種団体・運動体による貢献、各参与機関、若者や家庭のための奉仕職、キリスト教入信、典礼、さらに、シノダリティに特化したプログラムを含む初期養成と生涯養成、宣教活動、慈善活動と正義の働き、教育と文化、エキュメニズムと諸宗教対話の取り組みなどです。これらすべての分野の中でも、**この数年間、地方教会がもっとも重点的に取り組んできた分野**には、とくに注意を払う必要があります。この取り組みを支援するため、本「解説集」の第3部では、文書「2027–2028年 各アセンブリーへ向けて」ですでに提案された数多くのテーマや留意点をあらためて取り上げており、これらは、プロセスのこのステージにおいて役立つものとなるでしょう⁷。

以下の問いは、この働きの方向性を示し、継続的な取り組みを支える一助となりうるものです。

- この数年間の主のわざの中で、わたしたちを**驚かせた**のは、どういったことでしょうか。
- この数年間、共同体の歩みを照らしてきた聖書のことは、どのようなものだったでしょうか。
- 感謝すべきこととして、どのようなものが浮かび上がりますか。

また、見過ごされがちな点についても、じっくりと考察する価値があります。とくに注目すべきは、直面した**困難**、刷新への抵抗、旅路を妨げてきた障害、失敗に終わった試み、未解決のまま残されている問いです。さらに、初めて形になりつつある**洞察**やプロセス、そしてようやく見え始めた変化にも目を向ける必要があります。歩んできた旅路を振り返るということは、すでに十分成熟したものでだけでなく、ほとんど気づかれないほどに現れつつあるものや形を成しつつあるものをも認めることでもあります。つまりそれは、**若者たち**（神学生や奉獻生活の初期養成段階の人々を含む）の体験や声であったり、共同体の日常生活の**周縁に置かれている人の声**などです。

現段階では、何がもっとも重要であるかを判断する必要はまだありません。なすべきは、共同体の生活から生まれるあらゆるものを、大切に守り続けることです。何が重要で、物語形式の報告書に盛り込む価値があるものかを認識できるよう助けるのは、それに続く省察のプロセスです。さまざまな場、さまざまな時に生きられたさまざまな体験は、一つの、**共有された教会体験の一部として、徐々に認識されるようになる**でしょう。

⁷ 「D. 物語形式の報告書のために」参照。

b) 変革のしるしと動きを認める

資料や証言の収集が完了すると、シノドス・チームの活動はもっとも微妙な段階に入ります。つまり、時は満ち、収集されたものにじつくりと向き合い、多くの声を対話へと導き、さまざまな響きに耳を傾け、そこから意味が浮かび上がるようにするのです。

イタリア語の原文では、このプロセスを *rilettura* という用語で表していますが、英語にはこれと完全に一致する表現はありません。本「解説集」全体を通じて、わたしたちはこれを「祈りをもって生きた経験を振り返ること」といった表現で表しています。これは、**祈りの中で、また信仰と神のことばの光に照らされて、生きた経験をともに振り返る共同作業を指しており、それを通じて共同体は、その生活の中で、主が成熟させようとしているものを認めようと努めるのです。**可能な限り、このプロセスは、霊における会話の仕方に従って行われるべきものです。

生きた体験を、祈りを込めて振り返るという全プロセスは、この旅路全体に同伴し、本節の冒頭でも示されている根本となる問いによって方向づけられます。各地方教会は、それぞれの状況や利用可能な時間にもっとも適した方法を自由に採用することができますが、この「体験の振り返り」を行うにあたっては、以下の3ステップが参考になるでしょう。

しるしを認めること。収集されたものすべてが、同じ重要性をもつわけではありません。特定の体験、あかし、変化、直面した困難、あるいは動き始めたプロセスなどは、それらが祈りの中で、信仰の光に照らされて、ともに受け止められ、考え抜かれるとき、「しるし」としての価値を帯びるのである。このようにして、主がいかにして、その成長を導いているのかを、共同体は認識できるのです。以下の問いが助けになるかもしれません。

- 自分たちの教会の旅路について、どういった体験、証言、変化、困難、あるいはプロセスが、とくに重要なことをわたしたちに物語っていると思われませんか。
- それらのうちのどれに、主とその霊のわざを認めることができますか。

しるしに耳を傾けること。しるしに耳を傾けるには時間を要します。したがって、可能な限り、前の段階で浮かび上がった内容に何度も立ち返ることが役立ちます。時間をかけることで、当初は背景に埋もれていた側面が鮮明になり、少しずつその意味を理解できるようになります。このようにして、歩んできた道程へ理解が深まっていくのです。しるし全体に耳を傾ける上で、以下の問いが参考になるかもしれません。

- これらのしるしについて深く考え続ける中で、わたしたちのうちに響き続けているものは何でしょう。
- 主はわたしたちに何を呼び掛けていますか。

- これに照らして、わたしたちの旅路に関して、どういった理解が、徐々に形づくられているでしょうか。

変化のプロセスを捉えること。皆でともに、祈りを込めてしるしを振り返ることで、共同体の生活の中に流れる変化のプロセスが徐々に明らかになっていきます。それらは、一人ひとりの成長、人間関係の刷新、教会のプロセスや組織に反映されており、主がご自身の教会を絶えず刷新し続けている、回心と変革の道を明らかにしています。『最終文書』（11 項参照）で指摘されている三つの回心は、これらのプロセスを解釈するための貴重な基準となります。

- **関係性**の回心によってわたしたちは、互いに耳を傾け合う仕方、協力する仕方、カリスマや奉仕職を評価する仕方、兄弟愛と共同責任を実践する仕方がどのように変化しているか、考えるよう促されます。
- **教会プロセス**の回心によってわたしたちは、共同識別、意思決定、責任遂行、透明性・説明責任・評価の文化の育成、養成の提供、共同体生活の構築の仕方がどのように変化しているか、考察するよう促されます。
- **絆の回心**によってわたしたちは、交わりの地平がいかに拡大しているかを認識するよう導かれます。つまりそれは、他の地方教会との関係、他の諸教会やキリスト教共同体との関係、他宗教の信者との関係、地域社会における諸機関や組織との関係の中で、共通善の責任を担う上で、拡大しているものです。

これら三つの「回心」は、別々の道を指し示すものではありません。むしろ、これらは、同じ変化のプロセスに、異なる視点からわたしたちがアプローチすることを助け、その豊かさと相互関連性を浮き彫りにしてくれるものです。このようにして、今まさに現れつつある教会の具体的な姿と、主がその成長を導き続けている道筋とを、両方、認識することが可能となるのです。

c) 物語形式の報告書の構成をまとめる

この物語形式の報告書は、その体験を霊的に振り返る中で不可欠な部分となる執筆のプロセスを通してまとめられます。適切なことばを見つけるということは、何が本質であるかを理解し、さまざまな要素や動きを一つにまとめ、その地方教会の旅路を忠実に語ることでできることばを見出すことなのです。

報告書は簡潔であるべきで、通常は約 6～8 ページ（3,000～4,000 語）程度とします。各地方教会は、最適な構成を自由に決定できますが、物語形式の報告書は一般的に、以下の主要要素を中心に構成されます。

- **簡潔な導入**、起草プロセス、採用された方法論、および関与した人物、グループ、諸団体について紹介する、

- 物語の中心、上記プロセスを振り返った成果をまとめる、
- 簡潔なまとめ、主な課題や未解決の問いとともに、現れつつある、宣教するシノドス流の教会像を概括する。

もしその地方教会が、具体的な事例が描かれた旅路を示そうとするならば、限られた数の体験や「優れた実践例」を、物語形式の報告書に付録として付けることができます⁸。

物語形式の報告書の最終承認は、司教に託されます。司教が修正や変更が必要であると判断した場合は、その指摘の理由を説明した上で、報告書をシノドス・チームに差し戻します。この作業はアセンブリーの前に完了させる必要があります、物語形式の報告書は、参加者に十分な余裕をもって事前配布されるべきです。

2. 評価アセンブリーを準備し、それを生きる

物語形式の報告書が完成すると、この旅路の新たなステージが幕を開けます。つまり、司教に招集されて、地方教会はアセンブリーに集い、物語形式の報告書に込められた体験の霊的な振り返りを受け取り、分かち合い、解釈するとともに、次のステップへの方向性を示しながら、いままで以上に宣教するシノドス流の教会として成長する決意を新たにします。

重要なことは、アセンブリーに十分な時間をかけ、アセンブリーを構成する種々の場面が、バランスのとれたゆったりとしたペースで進められるようにすることです。ほとんどの場合、たとえ日程が分散していても、少なくとも1日（または半日を2回）、可能であれば2日間を確保するのが適当でしょう。

このアセンブリーは、極めて霊的な体験です。祈り（典礼的なものも個人的なものも）、沈黙、グループワーク、全体会議、休憩、そして会議空間への細やかな配慮、これらすべてが条件を整え、参加者が互いの声に耳を傾け、聖霊に耳を傾けるようさらに心を開き、それによって今後の歩むべき方向を見出すことができるようになるのです。

その価値は、そこから生まれる文書をはるかに超えたものです。このアセンブリーそのものが、シノダリティ体験です。それを通じて、地方教会は、これまで歩んできた旅路を振り返りつつ、日常生活の中で守り、育てていくよう求められる、耳を傾け、共同責任をとり、識別していく仕方を学び続けていくのです。

⁸ 報告書には、文章だけでなく、報告書の内容を表現する、シノドス・チームが選んだ象徴的な画像を添付したり、この旅路においてとくに助けとなった聖書箇所をいくつか挙げたりすることも可能である。これらは、アセンブリーに向けた準備の中で、報告書に関する省察と祈りの助けとなるだろう。

a) アセンブリーを準備する

教会生活におけるあらゆる重要な場面と同様、アセンブリーにも入念な準備が必要です。

アセンブリーの構成、参加基準、運営方法、および組織面に関する指針は、文書「2027–2028 年各アセンブリーへ向けて」に定められています。本「解説集」第3部では、その中でももっとも関連する箇所をいくつか再掲しています⁹。ここでは単に、アセンブリーを真に有意義な体験とするために役立つ、いくつかの要点について注意を喚起します。

- 参加者が祈りと省察の心をもって自分で読み込めるよう、物語形式の報告書を十分に余裕をもって事前に参加者に配布すること、
- アセンブリーの霊的準備に細心の注意を払い、神のことばに耳を傾けること、沈黙の時間、会話の質、そして信頼、内的自由、相互の聞き取りの雰囲気を作り出すのに役立つあらゆることを育てること、
- 慎重に、グループワークを円滑に進行する人びとを養成すること。なぜなら、彼らがこの手法に精通していること、また耳を傾ける祈りの雰囲気を醸成するその能力は、アセンブリー全体にとって貴重な奉仕となるから。
- アセンブリー会場の空間配置、スケジュール、レイアウトを慎重に設計すること。それによって、互いに耳を傾け合い、参加し、良好な人間関係を築けるよう促す。
- 祈りと典礼、グループワークと全体会議の時間を、バランスよくかつ有機的に交互に行うこと。それによって、神のことばに耳を傾け、エウカリスチアから力を得て、小グループでの深い会話と全体会議で成熟する共通認識が、互いを豊かにし合うだろう。
- 物語形式の報告書の再検討と諸教会宛ての書簡の起草双方のために、十分な時間を確保できる作業計画を策定すること。それにより、後者の作業がアセンブリーの最終段階に過度に詰め込まれない。
- 物語形式の報告書や諸教会宛ての書簡を共有するために、現地の状況にもっとも適した伝達手段を検討するとともに、アセンブリーの成果をどのように共同体に還元するかについて、当初から計画を立てること。それにより、共同体全体の関与を深めながら、この旅路を続けていける。

b) アセンブリーを進行する

アセンブリーの働きも同様に、シノドスの実施状況の評価プロセスを支える問いによって方向付けられており、この問いはすでに物語形式の報告書の準備段階においても適用されています。

皆さんの地方教会の中で、
どのような宣教するシノドス流の教会の具体的形、
どのようなシノダリティの新たな道が現れていますか。

⁹ 「E. 評価アセンブリー」参照。

「教会である『わたしたち』」として存在している、という自覚は、対話を通じて、共有された記憶という意識を通じて、さらに共同で実践した教会の識別によって見定められた方向へともに旅する決意を通じて、成熟していきます。

物語形式の報告書の再検討

アセンブリーの最初の段階は、これまで歩んできた旅路を振り返ることにあります。その旅路について、物語形式の報告書が体験についての最初の振り返りを示しています。アセンブリーは、その報告に耳を傾け、そこに語られる内容から課題を受け取るよう求められています。その上で、その報告書を自らのものとして受け止め、全員の意見を通して深め、そうすることで、これまで歩んできた旅路をアセンブリー自体が振り返ることとなるでしょう。

「霊における会話」こそが、この取り組みの方法です。それは、参加者が個人的な体験から、共有された旅路に属するものの理解へと移行する助けとなります。このようにして、もっとも重要なことが浮かび上がり、共同体の旅路の意味や、その過程で学んだことを表現できるよう、ともに練り直すことができるのです。対話を促進し、この方法を維持できるよう、十分に訓練された担当者が、各作業グループに配置されることは有益でしょう。

この共同作業を通じて、物語形式の報告書は徐々にその最終的な形を成していきます。アセンブリーの中で加わっていく内容や、より深い洞察が盛り込まれることで、この報告書は単なるシノドス・チームによる成果物というだけでなく、その地方教会によって認められ、分かち合われた物語となるのです。アセンブリーの実際の経過に照らし、司教は、物語形式の報告書が国（または地域）のシノドス・チームに提出される前に、アセンブリーで出された意見を報告書に盛り込む最適な方法をシノドス・チームに指示します。

他の諸教会あての書簡の作成

物語形式の報告書に加え、アセンブリーではまた、他の諸教会宛ての約2ページ¹⁰（約1,000語）の書簡を作成します。これは、初代教会の「交わりの手紙」（*litterae communionis*）という慣習に着想を得たものですが、この書簡を通じて、各地方教会は自らの信仰をあかしし、それによって、それらすべてを一致させる交わりを目に見えるものとしていました。諸教会への書簡の起草は、アセンブリーにとって重要な仕事であり、そのために十分な時間を確保すべきです。

起草作業の方向性を定める上で、特定の姉妹教会——たとえば、すでに確固たる関係が築かれている教会や、何らかの理由でとくに親近感を抱いている教会——宛てに書簡を書くことを想像することは、助けになるかもしれません。そうすることで、アセンブリーが報告書調になることを避け、簡潔で率直、かつ伝わりやすい言語を見つくるのを助けるでしょう。たとえ特定の対話者を念頭に置いて

¹⁰ もし必要であれば、書面による書簡に加えて、異なる媒体を通じて同じメッセージを伝える動画版を添えることもできる。

書かれたとしても、その書簡は、自国の司教協議会に属する教会をはじめ、すべての教会に宛てられ、分かち合われることとなります。

この書簡は、以下のいくつかの重要な要素を軸に、自由かつ創造的に構成することができます。

- 地方教会、およびその教会が置かれている社会文化的背景に関する**簡単な紹介**、
- **旅路で学んだことの分かち合い**（シノドス流の教会のこういった特徴が、とくに成熟したか）、
- 今後、地方教会が取り組みたいと考えている**主要な取り組み**や、さらに深めていきたいと考えている**洞察のうちのいくつかの発表**、
- 教会が、他の諸教会に託したいと願う、**希望のことば**と励ましのメッセージ。

ここにおいても、「霊における会話」が作業方法となり、小グループでの作業と全体会議を交互に行うことで、アセンブリーが書簡に盛り込むべき最重要点を、ともに特定できるようになります。運営上の理由により、アセンブリー期間中に本文を最終決定することが困難な場合は、司教がアセンブリーの意向に則り、最終草案を完成させるための最適な方法を提示することになります。いずれの場合も、どのような起草プロセスが採用されるにせよ、その書簡の本文を承認し、それを地方教会の旅路、およびアセンブリーの作業の真の表現として認めるのは、教区／エパルキアの司教の責務です。

c) アセンブリーの成果

物語形式の報告書と書簡は、各地方教会が他の諸教会や教会全体との共通の旅路に対して提供する貢献を成すものです。報告書が、これまで歩んできた旅路の記憶を表現するものであるのに対し、書簡は、プロセスのこの段階を特徴づける「たまものの交換」の精神に基づいて、その記憶を伝えるものです。これらが完成し、司教による承認を得たのち、それらは、今回に続く識別のステージに向けた地方教会からの貢献として、当該の国（または地域）のシノドス・チームに送付され、**2027年6月30日**までにシノドス事務局において共有されます（synodus@synod.va）。

各教会は、自らの体験を分かち合うことによって、他の諸教会と自分たちを結びつけるもの、そして**共通の旅路を豊かにするために主が自らに託してくれた特別なたまもの**とを、より明確に認識するようになります。

このように、この旅路は終わりを迎えるのではなく、新たな段階へと開かれていきます。一方で、各地方教会は、自ら認識し学んだことを踏まえ、より深い自覚をもって、各自の回心と改革の道を歩み続けます。他方で、その交わりの地平はますます広がっていき、つまり、このプロセスの次の段階において、諸教会は互いに耳を傾け合い、それぞれの体験を対話の中で共有し、教会全体としての旅路をともに歩み続ける機会を得ることができるでしょう。

3. 参考資料

以下のページでは、シノドスの旅路の主要文書、すなわち『最終文書』『2025-2028年シノドス実施ステージの旅路』および「2027-2028年 各アセンブリーへ向けて：準備のためのステージ、基準、ツール」から抜粋した箇所を掲示します。選ばれた箇所は、より実践的な性質の箇所であり、これらを1カ所にまとめ、各地方教会、とりわけそのシノドス・チームの活動を支援します。

この旅路におけるその他の基本的側面——たとえば、シノダリティの教会論的枠組み、シノドスがわたしたちに求める回心、霊における会話の実践、実施ステージの意義など——については、参照文書を参照してください。これらの文書は依然として十分に有効性を保ち、この旅路全体の参考となる枠組みを成しています。

A. 実施スケジュール

『シノドス実施ステージの旅路』

- 2025年6月～2026年12月：各地方教会およびその連合体における実施のための活動
- 2027年上半期：教区／エパルキアにおける評価アセンブリー
- 2027年下半期：各国司教協議会および司教協議会連盟、東方諸教会の位階的組織、その他の教会の連合体における評価アセンブリー
- 2028年第1四半期：大陸別評価アセンブリー
- 2028年10月：バチカンでの「教会総会（エクレジアル・アセンブリー）」

B. 「振り返り」ステージ

B.1 ステージの意義

「各アセンブリーへ向けて」

「各地方教会（教区／エパルキア）におけるステージは、2027年上半期に、振り返りと識別の時として行われます。これは単に再構築する作業ではなく、教会としての行為です。すなわち、これまで起きてきたことを収集し、認め、その意味を把握し、そして、今まさに浮かび上がりつつあるものを明らかにしていくことです。この文脈において、記憶とは過去を振り返ることではなく、歴史や共同体の生活における聖霊のわざの光に照らして、現在を読み解くことを意味します。このステージにおける働きの地平は、主に物語形式です。

このステージにおいて、地方教会はまず、これまで始められてきたさまざまな取り組みを集約し、それらを相互に関連づけるよう求められています。具体的には、宣教する存在としての新たな形態、共同責任の実践、耳を傾ける道筋、意思決定プロセスの変革、そして組織改革などです。それは、『最終文書』で強調された三つの教会の回心——すなわち、関係性の回心、意思決定プロセスの回心、諸教会相互および教会と地域社会との絆の回心——を念頭に置きつつ、その経緯、変遷、得られ

た教訓を語り、明らかにしていくことです。この視点に立ち、組織改革というレベルを無視することなく、回心の個人的側面と共同体的側面を両立させることが重要となるでしょう」。

B.2 ステージの構造

「各アセンブリーへ向けて」

「このステージは、密接に関連し、互いに補完し合う二つの場面を通じて展開されます。

- 最初の場面は、アセンブリーに先立って行われる**体験の霊的な読み直し**であり、これにより、さまざまな領域で体験されたことを収集し、整理し、焦点を当てることが可能となります。この作業の成果として、**物語形式の報告書**が作成されます。
- 第2の場面は**アセンブリー自体**であり、そこではこの最初の検討内容が有機的な形で受け取られ、共有されて解釈されます。つまり、互いに耳を傾け、共同識別することを通じて、この旅路に対するより深い理解が熟成し、守り、受け継いでいくべき本質的要素が明らかになるのは、まさにここにおいてです。

この両方の場面は、他の地方教会との交流に向けてと同様、共同体内部の成長にも向けて方向づけられています。つまり、成熟した成果が認識され、より広範な教会の旅路へ貢献するものとして提供されるのです。したがってアセンブリーは、評価するプロセスの最重要の成果を他の諸教会と分かち合うために、諸教会に宛てた書簡を執筆する機会ともなるでしょう」。

B.3 指針となる問い

「各アセンブリーへ向けて」

「このプロセスの一体性を維持するために、すべてのレベルにおいて作業を導く共通の問いが提示されます。それ自体の文脈に応じ、問いを具体化することは、各ステージにゆだねられています。

「2021–2024 年シノドス」の終了後に歩んできた旅路に照らし、
また、その成果を他の諸教会や教皇への贈り物として提供することに鑑み、
宣教するシノドス流の教会のどのような具体像が、また、シノダリティのどのような新たな道筋が、
皆さんの共同体の中で、浮かび上がっているでしょうか。

この問いによってわたしたちは、祈りの心をもって、『最終文書』を実施していく体験を振り返るよう導かれます。そこには、取り組み始めた実践、新たな始動、進行中の変革に加え、また直面した困難も含まれます。同時に、この問いは、諸教会間の語り合いと対話のプロセスを活性化させ、諸教会が自己閉塞に陥ることなく、これまで体験してきたことを、より広い交わりの地平の中に位置づけることを助けます」。

C. 教区／エパルキア シノドス・チーム

シノドス・チームは、地方教会においてシノドスの実施を促進し、同伴します。司教の責任のもとで活動し、参加を促進し、養成のプロセスを支援するとともに、アセンブリーの準備や、この旅路の成果をまとめる作業を支援します。

C.1 指針となる問い

『シノドス実施ステージの旅程』

「ふさわしく多様な構成をなしているシノドス・チームであれば、それはより容易にシノダリティの実験室となり、神の民の間で推進するよう招かれているダイナミズムを、自分たち自身の内部で実験できるでしょう。

実施ステージにおける彼らの役割は、まず第一に、各地方教会が置かれている具体的な状況の中で、シノドスのダイナミズムの成長を促進し、支援することです。そのために、養成のためのものも含め、適切なツールや方法論を特定し、必要な措置が確実に講じられるよう、必要な取り組みを実施します」。

『シノドス実施ステージの旅程』

「シノドス・チームは通常、教区／エパルキアレベルで編成されますが、可能であれば、地区または小教区レベルでも設置することが望ましい。さまざまな教会状況において、興味深い経験がすでに発展しており、これらのチームが互いに適切に連携することによって、シノドスの歩みをより広範に及ぶ、参加型のものにする貢献が可能なことを示しています」。

「各アセンブリーへ向けて」

「この観点からいえば、シノドス・チームは単なる運営組織ではなく、耳を傾け共同責任をとる体験が成熟した組織であり、これを維持し、さらに発展させていく必要があります。したがって、まだ実施されていない地域においては、教区、国、大陸レベルのシノドス・チームを再活性化し、支援するとともに、その構成員をシノドス事務局に報告することが不可欠です¹¹」。

C.2 シノドス・チームの構成

『シノドス実施ステージの旅程』

「その構成の基準は、意見聴取と聞き取りのフェーズで既に概説したとおりで、つまり、さまざまな年代、出身文化、養成の背景をもち、教会の多様な奉仕職とカリスマを代表する男女信徒、司祭・助祭、男女修道者です。したがって、その構成について世界中で有効な規則を定めることは不可能です。しかしながら、これまで得てきた経験から、検討するためのいくつかの提案を提示することはできます。

¹¹ 各シノドス・チームは、synodus@synod.va 宛てにリンクを依頼することで、シノドス事務局のデータベースに登録できる。

- a) 当該教区の生活と司牧活動との結びつきを容易にするため、**教区の指導層の幾人かがチームに参加することは有益でしょう。**
- b) まさに参与機関に推奨されているとおり（『最終文書』106 項参照）、宣教する志向性を確保し、自己言及的な態度に陥る危険を回避するため、日常生活や社会状況の中で、**あかしや使徒的奉仕に積極的に従事している人々にも、シノドス・チームに参加してもらうことは重要でしょう。**
- c) **他のキリスト教諸派や共同体、あるいは他宗教の代表者をオブザーバーとして招待すること**も検討に値するかもしれません。
- d) **司教がシノドス・チームの一員となることを妨げるものは何もありません。** そうしない場合には、司教はその活動について定期的に報告を受け、適当な時期にチームと会合をもつべきです。

個々のメンバーに求められる要件としては、『最終文書』の知識は当然のことながら、シノドスのダイナミクス、とりわけ意見聴取や聞き取りのステージで経験したダイナミクスについて、直接体験することも不可欠です。近年、シノダリティについての学校や研修の取り組みが国内および国際レベルで創設されており、シノドス・チームのメンバーの事前準備の強化にも活用することができます」。

C.3 シノドス・チームと参与機関

『シノドス実施ステージの旅程』

「シノドス・チームの権限は、参与機関の権限と重複するわけではなく、相乗効果を追求する精神のもと、それと調整されます。シノドス・チームは、その教区／エパルキアのシノドス流の活性化や養成に役立つよう設置されます。参与機関は、教会法によって規定された、能動的に協議していく任務を実行していくよう求められています。したがって、彼らの務めは、司牧上の優先課題を識別し、組織と意思決定プロセスを刷新しながら、シノドスの実施に必要な諸々の決定を入念に策定するよう貢献することです。定期的に調整を行い、タイムリーに情報を流すことで、各自の働きがより円滑に進むでしょう」。

D. 物語形式の報告書のために

「各アセンブリーへ向けて」

「この働きを支援し、具体的な形にするために、『旅程』では、各地方教会が、受け取りと展開の段階を認識するために、自問すべきいくつかの領域を提示しています。

- シノドス的霊性（『最終文書』43-46 項参照）、およびシノドス的視点に立った典礼（同、27 項参照）の促進、
- 奉仕職とカリスマの育成、叙階の秘跡を必要としない指導的役割や、その他の教会責務への信徒の参入（同、60 項、75-77 項参照）、

- 教会的識別の実践（同、81-86 項参照）、シノドス流スタイルによる意思決定プロセス（同、93-94 項参照）、およびシノドス流スタイルによる参与機関の運営（同、103-106 項参照）、
- 透明性、説明責任、評価の実践展開（同、95-102 項参照）、
- 小教区と地域共同体における宣教の刷新（同、117-119 項参照）、
- 近隣の教区間、地域内、および国をまたぐ結びつき（同、124 項参照）、
- エキュメニズムの関係におけるシノドス流スタイル（同、137-138 項参照）、
- 諸宗教関係におけるシノドス流スタイル（同、123 項参照）、
- 社会の中の組織化された存在（教育、文化、人間性の発展、受け入れ、保健医療など、同、118 項参照）における、さらに、平和、正義、わたしたちの「共通の家」のケアの推進（同、47-48 項、121 項参照）におけるシノドス流スタイル、
- シノダリティに根ざした養成活動（同、143-151 項参照）と、シノドス的特質を有するキリスト教入信の道（同、142 項参照）、
- その他。

このリストは、すべてを網羅したものではありませんが、こうした体験に関連する諸相が見落とされないための助けとなるよう意図されたものです。各地方教会は、**すべての項目に答える必要はなく**、自らの文脈において最重要な分野に、とくに注意を払うことが求められています。いずれにせよ、この振り返りにおいて、キリスト教共同体内の生活にのみ焦点を当てるのではなく、宣教的視点につねに開かれていることは不可欠です。つまり、「**シノドスを実施する体験は、人間の生活、社会生活の具体的状況において、教会が福音宣教する能力をさらに高めるために、どのような形で寄与してきたか、また今後どのように寄与しうるのか**」という問いです。

E. 評価アセンブリー

E.1 各アセンブリーの意味と、用語「評価」の意義

「各アセンブリーへ向けて」

「今後数年にわたって予定されている各アセンブリーは、シノドスの実施の中で、極めて重要な一歩となります。『旅程』でもすでに強調されている通り、これは、形式的にステージを追加することでも、2021-2024 年シノドスの類似ステージで既に体験されたことを繰り返すことでもなく、各教会が得た体験を、共有の知恵へと変容できるよう支援することです。ここで問題となるのは、単にプロセスの継続性ではなく、その成熟です。

その意図は、単純であると同時に要求の厳しいものです。つまり、聖霊によってはぐくまれてきたものを認識し、その旅路に依然として残る困難を理解し、現実的視点と信頼をもって、今後踏み出すべき歩みを見定めるためです。この意味で各アセンブリーは、単なる技術的見直しの場ではなく、教会全体が共有するプロセスの中で、識別、分かち合う共同責任、感謝を表す機会なのです」。

「各アセンブリーへ向けて」

「評価（アセスメント）アセンブリーは、シノダリティにおける共同体の成長の旅路の糸が一つに束ねる霊的プロセスであり、祝祭の時です。シノダリティは、交わりに根ざし、宣教へと向けられた、教会生活の不可欠な次元です」。

「各アセンブリーへ向けて」

「各アセンブリーとその準備において重要なのは、シノドスでの意見聴取のステージを繰り返すことではなく、**実際に体験したことから学び、その成果と課題を認識し、慎重な識別に照らして優先順位とプロセスを再調整し、教会の各主体同士の共同責任を強め、諸教会の間の、たまものの真の交換を涵養することです**」。

「各アセンブリーへ向けて」

「各アセンブリーは、その旅路のすべてを網羅するものではなく、むしろまとめと新たな推進力が現れる場面を体現するものです。そこで認識され、分かち合われたことこそが、そののちの歩みを導き、諸教会間の対話をはぐくみ、シノドス的、宣教的成長のプロセスが継続するよう支えることを意図しているのです」。

E.2 各アセンブリーの構成

「各アセンブリーへ向けて」

「各アセンブリーの構成は、その目的に沿ったものでなければなりません。それは単に、ある教区や、ある国・地域の教会を表わしているかどうかにとどまらず、現在進行中のプロセスに精通し、それらを神学的・司牧的に解釈できる人びとの出席を確保することが問題なのです。参加者の選定にあたっては、男女間のバランスや世代間バランス、文化的・教会的な多様性——司祭、助祭、男女奉獻生活者、各種団体・運動体・新しい共同体のメンバー、さらに既成組織に属さない信者を含む——、そして弱くされ周縁化された状況で暮らす人びと¹²の参加に十分な配慮を払うべきです。とりわけ、小教区の司祭の参加には細心の注意を払う必要があります。また、教会組織に直接結びつかない声も評価し、適当な場合には、他の諸教会やキリスト教共同体、諸宗教の代表者の参加を認めることも重要です。参加のレベルや形態は、文化的背景、能力、経験に応じてばらつくでしょうが、**参加者たちが2028年以降もこのプロセスを進んで支え、その継続性を確保するよう支援してくれることは必須です**」。

「各アセンブリーへ向けて」

「実際の会議への参加人数は必然的に制限されるため、できるだけ多くの信徒が、このプロセスに真に参画していると感じられるような方策も講じられるべきです」。

¹² 貧困や周縁化された状況にある人びとの効果的参加を保証するには、彼らを支えられる人びとによる具体的な形での同伴が必要かもしれない。そうすることで、彼らの貢献もまた、共同識別の中で真に受け止められ、評価されうる。

「各アセンブリーへ向けて」

「同時に、準備段階であっても、実際に顔を合わせる会議は、互いに耳を傾け合い、共同識別するためのかけがえのない場であるため、その重要性を過小評価してはなりません」。

F. 各国／各地域シノドス・チームの役割

『シノドス実施ステージの旅程』

「第1に、彼らには以下のことが求められます。地方教会を刺激することによって、地方レベル、とりわけまだ初期段階にある地域で進行中の歩みを支援すること。各教区シノドス・チーム間の調整とネットワーク化を促進すること。各地域に存在する、シノダリティの養成に関する学校や取り組みからの提案（とりわけチームメンバーや、実施ステージの推進に一番直接的にかかわる人のための）を考慮に入れた養成を提供すること。とくに、シノドス事務局が作成した資料を、現地の文脈によりよくインカルチュレーションすることを目指して、神学的、司牧的考察を促進すること、です」。

G. シノドス事務局のサポート

『シノドス実施ステージの旅程』

「しかしながら、可能な限り、本事務局はまた、個々の地方教会、奉獻生活の会、使徒的生活の会、諸団体、運動体、新しく創立された共同体、あるいはそれを要請してきたその他の教会組織にも同伴する用意ができており、その際、より資源の少ない教会を優先します。本事務局は、「扉を開いたままにする」¹³ことを約束し、各地方教会からのニーズ、洞察、提案に耳を傾け、実施ステージの内容と方法に関する要望に応えることで、彼らの活動を促進します」。

¹³ 連絡先メールアドレスは、synodus@synod.va。